

4-4. びまん性レビー小体病 (DLB)

- ・ レビー小体という物質が脳全体に沈着することで起こる変性疾患です。

びまん性レビー小体病の症状

- ① 認知機能の低下（アルツハイマー型認知症類似）
- ② 幻視
- ③ 日内変動 - 1日のうちで症状が変動する
- ④ パーキンソン症状

- ① DLB の認知機能障害の進行は AD の進行過程と酷似しています。
AD 同様、社会生活⇒手段的 ADL⇒ADL⇒排泄障害⇒基本動作の順に障害されていきます。中核症状として見当識障害・短期記憶障害・実行機能障害がみられます。
- ② DLB が AD と異なる点はこれらの症状に加え、幻視（わたしたちには見えないものが本人には現実としてみえる）や錯視（見間違ふ一犬の置物が本物の犬にみえる）、人物誤認（別の人と間違ふ）、幻の住人（誰もいないのに「知らない人が2Fに住んでいる」と他人が同居しているように思う）といった視覚領域の障害がみられます。
- ③ その症状は「日内変動」がみられ、特に多い夜にかけ活発にみられることが多くあります。
- ④ さらにパーキンソン症状が出現します。手の震え（振戦）や体が硬くこわばる（筋強剛）、動作がゆっくりになる（動作緩慢）、前かがみ前傾姿勢、歩幅が狭くなる（小刻み歩行）、足をすって歩く（すり足歩行）急に止まれない（突進現象）一度で立ち上がれず何度か反動をつける（後方突進現象）一歩目が出ない（すくみ足）よだれが出る（流涎）水分でむせやすくなる（固形物はむせない）と言った症状がみられるようになります。DLB の対応は AD の認知機能障害で記した対応に加え、パーキンソン症状を原因とする転倒（前方に転びやすく転ぶときに手が出ないため、あごや鼻をけがすることが多い）に注意が必要になります。日常生活に支障がないレベルを目標に抗パーキンソン薬を投与します。幻視など視覚領域の症状に対しては直接効果のある薬物はありません。幻視などによって不安になったり不眠となったときに対症的に抗不安薬・睡眠薬や非定型抗精神病薬を投与します。ちなみに、幻視は幻覚の一つですから、非定型抗精神病薬を服用させれば何とかなると思われがちですが、非定型抗精神病薬はその副作用にパーキンソン症状を誘発することがあり、レビー小体病の場合もともにパーキンソン症状がありますからそれを増悪させてしまうことがあります。また、幻視を取るという効果もほとんどありません。

BPSD 改善には、アルツハイマー型認知症と同様に問題とならないことに注意をそらすことが重要です。「物を盗られた」と考える時間を、作業活動に集中することで興味、関心を作業に移し、結果として「物を盗られた」と考える時間を減らしていくことが有効です。

パーキンソン症状

- 振戦（振える） - 企図振戦 何かしようとしたときに振えが出る
- 筋強剛（体が硬くなる） - 手や足が硬くなり曲げるのに抵抗がある
- 動作緩慢 - 動くスピードが遅くなる
- 姿勢反射の障害
 - 突進現象 - 急に止まれない = 顔から転倒する
 - 後方突進現象 - 椅子から立ち上がるのに反動が必要になる
- 歩行の障害
 - 小刻み歩行 - 歩幅がせまくなる
 - すり足歩行 - 足が上がらない 足をすりながら歩く
- 姿勢異常
 - 前傾姿勢 - 手をダランと垂らし前かがみで歩く
 - すくみ足 - 歩き始めや曲がろうとするとき1歩がでない
- 嚥下の障害
 - 流涎（よだれ） - 口腔内に唾液が溜まり、口元から垂れる
 - ムセ込み - 固形物より水分でむせる、咳払いをする
- 自動運動の障害 仮面様顔貌 - 脂ぎった顔で表情の変化が少なくなる
- 異なる動作の障害
 - 上肢、下肢 左右 で異なる運動を行うと反対の運動が止まる
- 自律神経症状 めまい 立ち眩み 発汗 など



**転倒、誤嚥に
注意が必要**